

令和5年12月12日

福生市議会議長 武藤 政義 様

建設環境委員会委員長 堀 雄一郎

令和5年度 福生市議会建設環境委員会視察報告書

1 視察日程

令和5年10月31日(火)～11月1日(水)

2 視察先及び目的

(1)長野県伊那市

「日本一の桜の里づくり」計画について

(2)長野県駒ヶ根市

「企業誘致等」について

3 視察参加者

委員長:堀 雄一郎
副委員長 :清水 義朋
委員 :幡垣 正生
委員 :三原 智子
委員 :森田 哲哉
委員 :川崎 善友
随 行 :池田 裕佳 (議会事務局議事係)

1 市の概要(令和5年11月現在)

(1)面 積 667.93km²

(2)人 口 65,520人

(3)世帯数 28,463世帯

(4)概 要 東に南アルプス、西に中央アルプスという二つのアルプスに抱かれ、その間を流れる天竜川や三峰川沿いには平地が広がり河岸段丘もみられる。東京・名古屋のほぼ中間に位置し、市内には中央自動車道や国道153号などの幹線道路が整備されている。平成18年3月31日に伊那市・高遠町・長谷村が合併し、新「伊那市」として誕生。雄大な自然と受け継がれてきた歴史・文化・伝統から、新たな価値を見出し、自律的な循環が連鎖するまちを目指し、歩みを進めている。

2 視察概要

<視察目的>

伊那市では、いつまでも絶えることなく、多くの人々に親しまれる桜の里を目指し、平成23年から令和2年の間の具体的な目標を定めた「日本一の桜の里づくり」計画を策定し、地域の桜管理の担い手として、地域桜守を育成し、学校教育への活用、市内全域の桜の名所へ観光客の誘導などを行っている。

福生市では、多摩川沿いの堤防の桜の老木化等が課題となっていることから、桜の老木管理と、三峰川堤防の植え替えの取組み等を調査する。

<調査事項>

「日本一の桜の里づくり」計画について

基本理念

伊那市では、コヒガンザクラ樹林を有する高遠城址公園をはじめ、桜の名所が数多く存在し、咲き誇る桜を大切にしながら、市民の桜に対する思いやり、愛着心の醸成を図り、「日本一の桜の里」をめざしている。

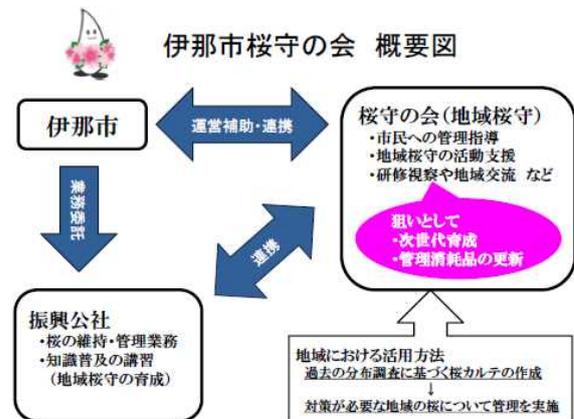


(1) 樹の管理について〔老木の管理手法・害虫、病害対策等〕

伊那市振興公社に5名(正規職員2名・臨時職員3名)の桜守が所属し、桜の保護管理の講習などを受けられた地域桜守が約50名いる。市の建設部建設課では「～初心者のための～伊那市桜管理マニュアル」も発行し、市民に配布している。

桜の特性として、剪定を嫌うこと、病虫害に弱いことなどがあり、その変化を早期に発見し対策を打つことの重要性もあり、地域桜守が果たす役割は大きい。

「日本一の桜の里づくり」の理念の浸透を図り、市民による桜の管理体制づくりを各地域で進めていくことを役割としている。



(2) 三峰川堤防の桜並木について〔桜並木復活の経緯・学校教育への活用等〕

伊那市内を流れる三峰川は、かつて堤防や川の中に約1,800本のポプラや桜が植えられ、洪水対策と共に市民のお花見の場となっていたが、治水工事や上流のダム建設のためのダンプカー等の交通量が多くなり、通行のための伐採やその影響で枯れていった。

1994年伊那市立美篤小学校の4年生が、郷土学習で地域の用水路などの歴史を学ぶなかで、「三峰川堤防の桜並木を復活させよう!」と提案したことをきっかけに、市や地域の人たちと協力して、1995年から2002年にかけて、桜56本を植樹した。

郷土史に詳しく、三峰川筋を勉強している青島区田園地帯景観形成住民協定委員会委員長の矢島信之さんによると「児童たちの活動に刺激されて、近隣の青島、境の桜堤防も復活しました」と紹介された。

この間、植えた桜の根が堤防本体を傷めないよう堤防の斜面にシートを張り、その上に土を盛った植樹用地も造成し、桜の植樹を行っている。現在、桜の植樹は行われていないが、美篤小学校の4、5、6年生が桜の観察記録や清掃等を行いながら、地域の人たちと保全活動を行っている。



視察成果のまとめ

福生市内には、多くの桜がり、特に多摩川堤防沿いの桜並木は、多くの市民の目を楽しませているだけでなく、重要な観光資源だが、老木となっている。

老木の管理や害虫対策は、いち早く被害に気付き対策を講じることが重要との説明があった。伊那市の「地域桜守の会」の活動や美篤小学校の4年生が1人2本の自分の桜を決めて観察記録を行うことで、桜や地域に対する愛情、環境保全への意識向上につながっていることがわかり、大変参考になった。

三峰川堤防の桜の植え替え(植樹)は、国の協力のもと、土手に盛土し、桜の根が土手を侵食しないようビニールシートを敷き、植栽したという大事業であった。福生の堤防は、住宅地に面しており、景観を考えた場合、この取組みは困難に思われた。

しかしながら、桜の管理についての話を伺う中で、桜はヒコバエをよく出すが、根の回りから出たヒコバエを丁寧に育てる「ヒコバエ更新という方法もある」との情報があった。

伊那市の取組みを参考に、桜を生かす様々な手法についての研究を市に提案したい。

長野県駒ヶ根市 視察 【11月1日(水)】

1 市の概要(令和5年10月現在)

- (1)面積 165.86km²
- (2)人口 31,470人
- (3)世帯数 13,360世帯
- (4)概要 「駒ヶ根」という名前は、駒ヶ岳の麓のまちという意味で、東に南アルプス(赤石山脈)、西に中央アルプス(木曾山脈)の3,000メートル級の山々を望むことができる長野県南部の伊那谷のほぼ中央に位置している。降雪が少なく晴天の日が多いことが特徴。豊富な水資源に加えて、市域東部の竜東地域は全国有数の日照時間を誇っており、米や野菜、マツタケ、ブドウ、リンゴなど様々な農産物が生産されている。

2 視察概要

<視察目的>

都市部から「人と仕事の流れ」をつくることを目的に、平成29年3月1日に開設された駒ヶ根テレワークオフィス(通称:Koto コト)で、仕事を市民ワーカーに発注・管理する業務や仕事を行うための事務機器を整えたセンターの運用状況を視察。新たなオフィスの整備や空き物件の斡旋によるICT産業等の企業誘致や仕事と休暇を組み合わせた「ワーケーション」の取り組みなどを参考とするため調査する。

<調査事項>

「企業誘致等」について

(1) 駒ヶ根で働く

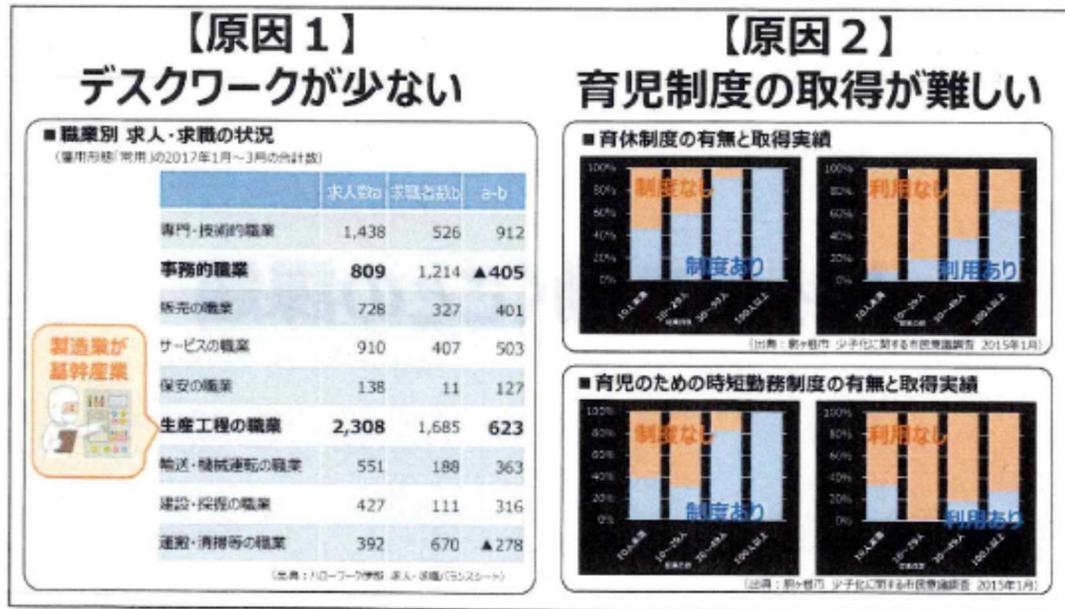
駒ヶ根市は中央アルプス・南アルプスの抜群の眺望のほか、日本最高所(2612m)の駅まで登ることが出来る駒ヶ根ロープウェイ、温泉などの観光資源に恵まれている。中央自動車道のインターチェンジが2つ、JR駅は4駅、市内の幹線道路も整い交通インフラも充実している。夏は涼しく、冬は晴天に恵まれることなど、自然環境に恵まれている。

立地を活かし、1994年以降、主な製造業だけでも累積49社の企業誘致に成功、温泉宿やビジネスホテルなどの観光業も行われている。

比較的コンパクトな市域に、閑静な住宅街のほか、豊富なショッピングスポット、教育環境、医療機関等も備えていることから、移住者の増加も見られるなど、全国1位となったこともある「住みよさランキング」(東洋経済新報社)では、全国812市中で11位となっているなど、住環境で高評価を得ている。

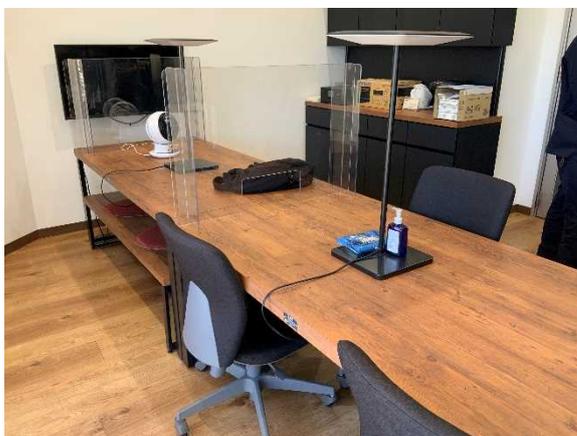
(2) テレワーク事業について

市内の基幹産業は、製造業ということもあり、生産現場での仕事が多く、女性が「出産を機に仕事を辞めざるを得ない」「デスクワークが少ない」「育児制度の取得が難しい」という課題が明らかになった。



この課題解決のために、テレワーク事業を開始した。2017年に駒ヶ根テレワークオフィス「合同会社Koto」を設置、サテライトオフィスとテレワークセンターを運営している。進出企業は2社(移住スタッフ1人)、地元雇用5人(パート社員)、合同会社Koto利用登録者(市民テレワーカー)累積約300人(95%が女性)で、稼働者は1か月で40人から50人となっている。月収30万円以上の例もあるが、平均で約4万円となっている。市民ワーカーは、専門性を必要とせず、研修後に業務委託を行っている。

市民向けテレワーク事業は、業務委託の形で、市民テレワーカーに仕事を提供し、サテライトオフィスでは、地元雇用で本社業務の一部をオンラインで行っている。



東京からの移住者から「東京でと同じように仕事ができます」「子育てとの両立ができる」「市がサポートしているという安心感がある」などの声があがっている。

視察成果のまとめ

企業誘致に伴う移住者の課題、特に女性の働く場がないという課題解決に向けての取組であったが、今では当たり前になったテレワークにいち早く着目し、コロナ禍前には事業化されていたことに驚かされた。

福生市は、都心への通勤圏内でもあるが、豊かな自然に近い住環境を求める人には、魅力的な立地である。「共働き子育てしやすい街」を宣言してきた福生市としては、子育て世帯が働きやすい就労環境や事業所の誘致を考える必要がある。

企業誘致の観点からは、製造業などの工場誘致は土地利用の観点から難しく、テレワークやサテライトオフィスの誘致などの取り組みを進めることが考えられる。

今回の視察で得たものを生かし、市には、将来を見据えたニーズ調査や新たなライフスタイルの提案などを求めていきたい。